

平成22年4月28日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007年度～2010年度
課題番号：19520117
研究課題名(和文) 日本19世紀版画史の再構築

研究課題名(英文) A Study of Japanese Woodblock Prints in 19th Century

研究代表者

菅原 真弓(SUGAWARA MAYUMI)
京都造形芸術大学・芸術学部・准教授
研究者番号：10449556

研究代表者の専門分野：美学・美術史
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：美術史、日本、版画、浮世絵、19世紀

1. 研究計画の概要

本研究は、19世紀日本における版画、および広い意味での複製芸術制作の実態を、作品に即して検討し、従来、1868年の明治維新を以って分断されていた日本版画史の19世紀像を再構築することを目的としている。具体的には、当時、世界最高の技術を誇っていた木版画(浮世絵版画)に加え、銅版画、石版画、写真までを視野に入れて、作品および関連史料の検討を行うと共に、版画を複製技術という側面からとらえ、新聞や雑誌といった媒体への進出と求められた用途、普及のありかたを、版画＝複製技術が進出した媒体の社会的、歴史的背景からも読み解き、19世紀日本版画の連続性を明らかにするものである。

2. 研究の進捗状況

上記の計画のうち、主に幕末期(19世紀中頃)の木版画(浮世絵版画)については、着実に研究の成果を発表し得ている状況である。また発表の前段階である作品、文献調査については、当該時期の木版画と木版画家の作品及び文献資料に加え、石版画の作品調査も行なっている状況である。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

(経緯と現状、理由)

19世紀の複製媒体すべてを視野に入れている研究ではあるが、現状において、やはり自らの研究土台となる、木版画という媒体を主軸に据えて、それとの比較において他の媒体について検討する視線へとシフトしている状況と言える。これは、19世紀の

木版画という媒体自体についての研究が、未だ層が浅いためである。とりわけ、明治期に入ってから木版画については、他の複製媒体との関係が深く、また単に一枚刷りの製品としての版画としてだけでなく、その進出範囲は幅広いものとなっている。そうした木版画の様相については、今後の研究で明らかにしていく必要があるが、現状においては目標値の70パーセントほどの達成度と言える。木版画以外の媒体については、作品調査も含め、30パーセント程度の達成度にとどまる。

4. 今後の研究の推進方策

前項にも記したように、当該時期の木版画自体の研究蓄積が未だ浅い現状においては、今後はこの媒体にしばって、その全容を明らかにしていく必要があると思われる。しかしながらその視点は、木版画だけに留めるものでは決してなく、本研究の視点と同じく、他の複製媒体との関係性に注目していくべきと考えている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

①菅原真弓「技術とモチーフ—明治初年の主に版画における風景表現をめぐる」『GENESIS』(京都造形芸術大学紀要)14号、2010年9月予定、査読有り(審査済み)
②菅原真弓「『縦絵』の時代—歌川広重と縦構図の風景画について」『GENESIS』(京都造形芸術大学紀要)13号、2009年9月、査読有り、pp101～128

③菅原真弓「「血みどろ絵」考」『GENESIS』（京都造形芸術大学紀要）12号、2008年9月、査読有り、pp.73～89

④菅原真弓「描かれた『道中膝栗毛』」『東海道中膝栗毛の世界』展図録、2008年6月、査読無し、pp.12～20

⑤菅原真弓「小林清親の光と広重受容」『GENESIS』（京都造形芸術大学紀要）11号、2007年9月、査読有り、pp73～89

〔学会発表〕（計2件）

①菅原真弓「歌川広重と木曾街道の旅」美術史学会西支部例会（於・大阪市立東洋陶磁美術館）、2009年11月

②菅原真弓「小林清親の広重受容」第60回美術史学会全国大会（於・九州大学）、2007年5月

〔図書〕（計4件）

①中江克己、室伏哲郎、菅原真弓『大江戸「春画」入門』宝島社（宝島文庫）、2010年3月、pp84～126

②菅原真弓『浮世絵版画の十九世紀—風景の時間、歴史の空間』ブリュッケ、2009年11月、総頁数395

③辻惟雄、安村敏信、山梨絵美子、児島薫、横田洋一、塩谷純、小栗祐美、田島達也、菅原真弓『激動期の美術—幕末・明治の画家たち〔続〕』ぺりかん社、2008年10月、pp121～160

④室伏哲郎、酒井雁高、菅原真弓『別冊宝島春画』宝島社、2008年6月、pp81～120